

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 10 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520305

研究課題名 (和文) キケローにおけるテオリアとプラクシスのローマ的統合

研究課題名 (英文) Roman Synthesis of Theoria and Praxis in Cicero

研究代表者

角田 幸彦 (KAKUTA YUKIHIKO)

明治大学・農学部・教授

研究者番号：70142544

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学 (英文学を除く)

キーワード：ローマ共和政、元老院、裁判、弁護士、属州支配、正義、市民権、財産没収

## 1. 研究計画の概要

ローマ最大の哲学者キケローにつき、すでに私は彼のギリシア哲学の理解そしてそのローマ化、修辞答理論書の数々、元老院での政治活動は十分研究して著作に著してきた。本研究はローマの法律にも十分通じ、正義につき作品も残しているキケローの裁判弁説を彼の法理論と実際の裁判活動から考察する。ローマで最もテオリア (理論) 性において秀でていたキケローは、その一方で政治と裁判におけるプラクシス (実践活動) 性にも、驚嘆すべき情熱を示した。プラクシスとテオリアの統合こそキケローの真の偉大さである。これを明らかにする。中心としてキケローの裁判弁説作品を研究する。

## 2. 研究の進捗状況

テオリア (理論) とプラクシス (実践、公共的活動) についてはじめて哲学的な高度の考察と反省を行ったのは、ギリシアの大哲学者アリストテレスである。理論や学問への精神の高まりは、理性的存在としての人間の目指すべきものであり、幸福の源泉である。しかし一方人間は社会と国家に帰属し、同胞との絆で結ばれており、単に自己の精神形成にのみ集中するわけにはいかない。誠実であればあるほどテオリアとプラクシスの相互関係は人間の大きな問題である。ローマ最大の哲学者キケローはアリストテレスの悩んだこの視界 (極めて人間的な問い) を単に理論的に解決するのではなく、彼の生涯を通じて学びと行動において統合しようとする。テオリア (高い理想的世界の構築) とプラクシス (現実の国家政治に参画し、国家の危機を救わんとする熱情ある行動) は相互的影響、両面の強い絆においてこそ真の緊張ある統合へ向

かうことができる。

私はキケローの全哲学作品、全ての政治弁説そして残っているその裁判弁説の全てを原典と欧米の定評ある研究文献を隣り合わせて読み、既に 2008 年から三冊『体系的哲学者キケローの世界』『キケローにおけるヒューマニズムの哲学』『政治哲学へ向けて—政治・歴史・教養 (キケローとプラトン、ヴィーコ、ブルクハルト、アーレント、レオ・シュトラウス) —』を公刊してきた。今後更に本研究の航路は、キケローの法論 (法哲学) とローマ法の体系へと進むことになる。ローマ的精神・心理の造形者キケロー、ローマ精神のギリシア精神に吸収されない独自性たる法の体系的形成を欧米の研究文献を多彩に駆使して論じ詰めることが 2011 年の研究路となる。

なおいわば「19 世紀のキケロー」と私は捉えるスイスの歴史家、キケロー同様教養の奇蹟ブルクハルトをキケローと結び付けることも著作化する決意である。

## 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

本研究テーマには、キケローに先立ってテオリアとプラクシス—理論・学知と実践・公共活動—を深く考察したアリストテレス研究が必要であるが、これについては 10 年以上かけて考え、書き著作も二冊公刊してきた。そしてキケローについては政治哲学とかれの人間愛 (ヒューマニズム)、修辞学と実際の修辞 (雄弁) 性に富んだ政治弁説を 7 年以上書き著作化してきた。本研究の下支えとも言うべき上述の準備が思った以上に本研究に光を与えてくれた故、こういう判断と

なった。

#### 4. 今後の研究の推進方策

ローマ人キケローのローマ性、キケローという総合力のある奇蹟的な幅ある全体人とローマ精神を更に深く論じ詰める。そしてローマ精神がギリシア精神を自己化（ローマ化）して、ヨーロッパ精神の真の基盤・源流となったことを説得力ある論述へもたらすことを目指す。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計3件）

- ① 角田幸彦、文化書房博文社、『キケロー 裁判弁説の精神史的考察』、2010年、702頁。
- ② 角田幸彦、文化書房博文社、『政治哲学へ向けて——政治・歴史・教養（キケローとプラトン、ヴァーコ、ブルクハルト、アーレント、レオ・シュトラウス）』、2010年、251頁。
- ③ 角田幸彦、文化書房博文社、『キケローにおけるヒューマニズムの哲学』、2008年、354頁。